
東方妖限騎 ~ we theleading ~

JUDAS SOUND

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方妖限騎〜we the leading〜

【Nコード】

N9893V

【作者名】

JUDAS SOUND

【あらすじ】

少々ボーッとしていたら何時の間にか寝ていたらしい。ハッとして起きたら周りには今までいた所とは別の場所にいた。はて？此処は一体……？

プロローグ

ありえん。

そんなばなな。

なにそれこわい。

おい、やめろ馬鹿

大丈夫じゃない大問題だ。

……………ふう、落ち着こう。いや無理だ。

この状況で落着つける奴がいたら百円やろう。

何故落ち着けないかって？そりゃ……………

ハッ！？つとしたらそこには森が広がり、湖があつたら皆は如何りアクションする？落ち着けるか？

「僕には出来ない」

はあ…………。

今日はもう出来る事はした。ここら辺一体の調査や、……………まあ、色々と。

だから今日はもう寝る。もう夜で眠いし何より動いて疲れた。飯食ってないし。

明日からどうなる事やら。てか最終的には落ち着いちゃったよ。も

うどつでもいいけど。

時は経って次の日。

俺はある事に気がついた。

自分の身体が何故か鎧で覆われている事だ。

いや、感覚はあるのだ。冷たいとか暑いとか寒いとか。

だが、痛みや痒み、自分の害になる物を一切通さないのだ。多分。

多分というのは、まず、そこまで俺に障害を与えようとする者がいないからだ。

それともう一つ。

此処別世界なんじゃね？てか疑う余地無いんじゃね？今更だけど。

だって昨日大体昼位から歩き続けてどこにも何も無くて在るのはただ森と草原と時々崖と山と、

『村』。

これ一番決定的。

少なくとも俺の住んでいた日本に縄文的服装をしている奴はいなかった。いやもしかするといったのかも知れない。俺は見た事も聞いた事も無いが。

つてなわけで『此処別世界なんじゃね？』論が俺の中では今の所確
信論となっている。

これから俺は如何すればいいのやら。

プロローグ（後書き）

初（実際は二作目）東方小説。

身体はダウンロード、頭脳は微妙。そのn(r y(前書き)

二話

身体はダークロード、頭脳は微妙。そのn（ry

あれから数十年。一つ気が付いた事がある。

俺の能力である。

勿論、俺の元いた世界には能力を持つてる奴なんかいなかった。（前回も言った通り俺が知らないだけかも知れんが）そしてそれは俺が既に別世界に来ている、或いは相位別次元に来ている十分な証拠となった。

『形の無いものを元の性質を変えずに変質させ形を与える程度の能力』

……改めて思うが、まあ、何とも、理解に苦しむ能力である。長いし。

それと俺の記憶からして能力の最後に付く『』程度の能力』とは恐らく某上海でアリスな幻楽団の東方projectというゲームの能力で、これによって俺はそのゲームの中、いや、その東方の世界に入り込んだという事が分かる。

……話を戻そう。

で、俺のこの身体。このなんか鎧っぽいもの。

これは俺の能力が自発的に自身を守るために発動した結果であろう。……然し、自分で言うのもあれだが、以外にカッコいいのである。

鎧としては。

全体的に黒を基調として、金の装飾に赤のライン。光沢は反射した光が目に入ればそれはもう……思い出したくない。（要はメッチ

ヤ光沢あります)

因みに、自分の姿形は湖で水面に映ったのを見ただけである。

…また話が逸れたな。

で、この『形の無いものを元の性質を変えずに変質させ形を与える程度の能力』は、例えば電気は決まった形が無い。この電気に俺の能力を使うと、

属性：電気

形：無し

材質：電気

属性：炎

形：有り

材質：電気

といった感じである。(ちょっと違うか?)

この場合、上と下を比べて下は材質が電気で属性が炎、となっている。これは要するに二つの属性が付いていると言う事である。

試しにこの変質させた物質を集めて剣状にして、近くの木を切り倒してみると、驚く事に一瞬で電気が通り、瞬間的に燃え、爆発した。爆発とは物質が一気に燃えると起こる現象である。

……と言う事は何でも即座に触れたものは燃やしてしまうと言う事だろうか?

所のだが、性質を変えずに変質など、させられるのだろうか? いや、実際出来ているのだが……。

たまにしか使う事は無いが、少々ややこしい汎用性に富み、その分の効果が期待できる。
これがあれば恐らくだが、瞬間移動や無から有を作り出す事も可能なのではないだろうか？

俺がこの世界に来て今の所細かく計算して（日は省く）、【26年4月】。

前世の年数も合わせると、【43年8ヶ月】。

実際俺は物凄いわつさんである。年齢的には。

だが、湖の近くで遊んでいる妖精達と話している時の声から察するに、俺は老けていない。それも、前世から、全く。

声が変わってないのだ、要は。

老けないという事は要するに俺が人外であるということ。俺の何時も入ろうとしている村（追い返される）の人間は、たまに門番や村長が代替わりしている。

だと言うのに俺は代替わりどころか、老けてすらいない。老けない

理由は幾らでも説明がつくが、周りが普通に老けているとなるとそれは難しい。

まあ、そこまで細かく年齢云々を考えても仕方ないだろう。そして俺が村に入れない理由は恐らく妖怪かなんかだと思っているのだろう。多分実際そうだろうが。

……これはあくまで憶測だが、俺の他にも妖怪がいるとしたら、俺を入れないのも無理は無い。

第一に妖怪は人を食らう。そんなものが大勢いる中を一人だけで生き延びるはずも無い。

そして村の外に残るのは、否、残れるのは妖怪のみ。これなら仕方ないだろう。

………つてあれ？それよりもっと以前に、俺の格好が若しかして駄目だった？

「如何したんです？」

「ん？いやなんでもない。気にするな」

俺が湖畔の木陰で考え事をしていると、フヨフヨと妖精が飛んできて話しかけてきた。

考え事と言うのは、俺のこの鎧の事である。

如何にもこれは、関節間が全て軟質軽金属で繋がっているの様なのだ。

外そうにも繋がっていても、千切る訳にもいかないし、一時期能力のせいならば、能力の発動を停止してしまえばいいのだ、とも思っただが……………はあ、制御が利かないのだ。

他の物を変質させる事は出来ても、こればかりは無理だった。うゝむ、如何したものか。

「……………なあ、お前は能力を持つてるか？」

「へ？私、ですか？」

「そうだ」

「うゝん、すみません。私自身は持っていないのですが……………」

「東の山の方へ行つた先に滝があつて、その近くに光を打ち出す変な奴がいると聞いた事があります」

「光……………」

「はい」

光、とは何の事だろう？打ち出す光とはレーザーの事だろうか？だとしたら……………弾幕？

これは早急に行つて確かめてみよう。何か分かるかも知れん。

「わかった。ありがとう。行つてそいつに会つてくる」

「あ、はい！お役に立てたならそれで……。頑張ってください！」
「おう」

返事をして、俺はその東の山の近くの滝に向かって歩き出した。

身体はダウンロード、頭脳は微妙。そのn(r y(後書き)

更新不定期。一日更新は直に途切れる気がしますww

妖怪と人間の些細な違い（前書き）

三話

妖怪と人間の些細な違い

一人滝に向かい歩く事数時間。漸く森を抜け少々広々とした草原に出た。

此処は周りよりも多少高度が高いようで、下の方にある森や、……

あれは竹林か？ が見える。

そして今俺が向かっている方向を見れば、他の物より明らかに高い山が見える。

「…………アレかあ……………」

そういつて大きくため息を吐く。

俺は昔から肉眼での距離観測や弾道計算が人一倍得意なのだが、この距離は明らかに他の誰が見ても、今のペースで歩いて今日中に辿り着けるものではない。
よって、

「飛ぶか……………」

呟いて置いてなんだが、俺は実際に飛ぶ、と言う事を試した事が無い。
い。

なのでどうやって飛べいいのか分からない。妖精や妖怪は皆、何の問題も無く飛んでいる奴もいるが、アレは一体どうやっているのだろうか？

「…………妖力の噴射……………」

何と無く、と言うか絶対違う。そんな事してたら戦ってる最中で残量ゼロになってしまう。

だが今俺はべつに戦っている訳ではない。

…行けるか？

そう思い、能力を発動。

（何故能力を使うかと言えば、妖力に形を持たせてジェットのように飛ぶためである）

丁度近くに小さな崖があったのでそこからジャンプして飛べるかどうか確かめてみよう。

…そういえば、ここら辺はやけに崖が多い気がする。地殻変動によるものだろうか？どうでもいいが。

心の準備が整うと同時に如何でもいい思考を廃棄して、行動に集中する。

そして

ブワアアアアアアアアアアアアアア…（あああああああああああ
あ！）俺の叫び

飛んだはいいが途中で燃料切れで墜落、不時着。情けない。

途中まではよかったのだ。最初の部分を除いて。

最初は制御が出来ずに訳の分らない方向に飛んだりしたが、段々とコツが掴めて来て目的の方向に飛び始めて数十秒。

ジェットの噴射音がいきなり消えたと思ったら、身体にまったく力が入らなくなっていて、身動きが取れない状態だった。恐らく妖力切れだろう。

知らなかった。妖力がなくなると此処まで酷い事になるとは……。不時着してから数分程度（数分だと分かったのは日が全然動いていなかった為）気を失い、今起きたところである。

未だに身体に力が入らない。人間は元からそこまで力が無いので霊力（？）が切れても問題はさしてないが、妖怪は違うのだろうか？まあ違った結果がこれだが。

暫くは動けそうに無い。昼寝でもするでしょう。

妖怪と人間の些細な違い（後書き）

そういえばコミケお疲れ様です。一週間前ですが（笑）

いや、俺は初コミケだったんですが、大変でしたね。はい。

友達と行ったんですが、所持金があまりに少なすぎて、殆ど何も買えませんでした。

コミケ前に金を使うのはよくないですね。

それに人酔いして更に酷い事に（笑）

疲れた後の俺の能力の使い道：前編

「ヘクシヨンツ！……チツ。寒いな」

俺が目を覚ますと辺りは雨音で埋め尽くされていた。

昼寝するつもりが結構な時間寝ていたらしい。恐らく一日ほど。

ついさっきまでは、天気は快晴だった。遠くにも雨雲どころか雲すらなかった。

それが此処まで土砂降りになるとすれば、大体それ位の時間が経っているだろう。

感覚的には昨日（？）よりは回復しているがそれは寝た事による回復の早さもあるが、それ位しか俺の妖力キャパシティがなかったと言ふ事だろう。自分で思っていて悲しい。

まあ立てる位には回復している。これなら走れば（別に急ぐ必要は無いが）多少は早く着くだろう。

然し俺が落ちたのは山の少し手前の森。走るにしても木が邪魔である。

全て切り倒しても良いのだが、自然界全てを敵に回して生きて行ける程、この世は甘くは無いだろう。

まあそこは妖怪持ち前の動体視力と運動神経、そして俺の妖力で何とかカバーしよう。

……あれ？そういえば鎧はどうなったのだろう。

アレも確か俺の妖力から作られてた筈……。

……あ。

【俺】

『装備』

頭：装備なし

胴：装備なし

腕：装備なし

腰：装備なし

脚：装備なし

.....あ。

取りあえずなんか着よう。

僅かな妖力で作った服を着て走り出す。

今の時代には絶対的に有り得なさそうな服だが、まあ大丈夫だろう。
色々。

てか妖怪って皆こうなのか？スゲー速い気がする。……………今なら新幹線を追い越せる気がする……………そう思っていた時期が僕にもありました（笑）。

「…そろそろか」

山が近い。山頂が木の葉の隙間から若干見える。

と同時に何だろう、山に入った途端に空気が重くなった気がする……いやこれは……

立ち止まってグハアッ?!

立ち止まれなかった（鼻血）。

正面にあった木に思いつきりぶつかつた。いてえ。鼻が潰れるかと思った。いや若しかすると潰れてるかもしれない。だとしたら嫌だなあ。俺すっげーダセーじゃん。

……………直そう。

妖怪修復中……………

修復完了。

治った。お陰で妖力はまた限界になってしまった。動ける程度には残したが。
ふう、さて。

仕切りなおし。

山に入った途端に空気が重くなった気がする……いやこれは……

既に立ち止まっているので、少し山の中の気配を確かめてみる。

……山の上にあるのは木ばかり。然しその中に、激しく動いている妖力の塊を複数感じる。近くだ。

更に山の中腹辺りに沢山、なにやら集団性を持った何かが沢山いる。

因みにこの気配探索は一部の空気を『変質』させ、俺の身体の一部と言う『形』を与えた物である。

まあこの場合空気は元が変質していないので、今回のものを言葉にすると

ここら一体の空気が俺の身体の一部になった。然し空気なので触れる事も見る事も出来ない。

である。

まあ俺の能力の理解の仕方は別に如何だっいいい。

それよりも俺が気になるのは、激しく動いてる複数の妖力の塊の中心にある小さな『力』だ。

中腹の方は後回しにして、こっちを先に見に行ってみよう。

疲れた後の俺の能力の使い道：前編（後書き）

そつえばコミケお疲れ様です。先週ですけど（笑）

自分も初コミケ行っただんですが大変でした。

次からは色々対策練っていかないと。金も貯めて置かないと（笑？）
脚が死ぬほど痛かったのは笑えなかった。

最後に、能力分かりにくくてすみません。文章短くてすみません。
こうした方がいい。直した方がいい。誤字・脱字や感想ドシドシ下
さい！

でわ。

疲れた後の俺の能力の使い道：後編（前書き）

後編DEす

疲れた後の俺の能力の使い道：後編

「なんともまあ、ひでえな」

行った先には複数の妖怪 天狗か？ に追い回されながらも機会を見つけては反撃する小さな妖怪少女（だが恐らく今は俺の方が力的に小さい）の姿があった。……まるでカラスに追われる子猫の様だ。

実際今直ぐにでも飛び出して助けてやりたい所だが、今の俺が出て行った所で何の助けにもなれない。だが此処でじっとしている訳にも行かない。その間に少女が殺られてしまったら見殺しにした様で此方としても目覚めが悪い。

…そうだ。俺にはまだ、アレがあるじゃないか。

さっきの空気。

一度能力で変質させて形を与えた物を意図的に解除、元に戻すと能力の発動に使っていた妖力が返って来る。流石に全てではないが。それで俺の残妖力を増やそう。元から大した量じゃないが帰ってきた妖力を併せて俺の全力を出せば、結構な濃度の妖霧を作り出す事が出来るだろう。その間にあの子を逃がす。

縄張り意識の強い天狗とはいえ、一匹を複数で叩くあのやり方は、……とてもじゃないが許せない。

一泡吹かせてやる。

「出て行け」

「……………」

私が山の森の森林浴にきていたら突然声を掛けられた。

来たばかりだけど、此処は空気が綺麗でとっても落ち着く場所だからもう少しで眠れたのに。

少し身体を起こして問いかける。

「なんで？」

「答える筋合いは無い」

ちよつとイラッときた。先に此処に来てたのは私なのに。私も出て

行く筋合いなんて無い。

「聞こえなかったのか。出て行けと言っている」

聞こえてるよ。五月蠅いなあ。

さっきから何なのさ、突然現れて出て行けって言つて、なんでと聞けば答える筋合いが無いと言つて。

「命令を聞かないなら、此処でその命を無駄にしたい。という意味だな」

勝手に一人で喋って自己完結している。なんなのだ、私はまだ何も答えていない。

流石にもう我慢の限界だ。追いつく。昨日今日来ただの妖怪1匹如きに、負けるとも思えない。

これは決して自惚れでは無く、私なりの確信があるのだ。

追いつく為に、自己完結している空を飛ぶ妖怪に向かって、

手から光線を撃つ。

これはここら辺では私だけが持っている特殊な技だ。空から降る光を収束させて撃つ。

力の消費が0に近いにも拘らず、光なので中れば焼けるような痛みを襲われる。

それにただの光線ではない。

『確実に』中るのだ。私の能力で。

『狙いを確実にあてる程度の能力』
『光を収束させる程度の能力』

これが私の能力。

私の知る限りの妖怪や人間の中で能力を持つのは私ただ一人だけだ。そして能力の便利な点は、消費する力が少ないところだ。だから小妖怪の私でも

此処まではよかった。

向こうは途中までは盾や剣で防ぐだけでだったのに、次第に似た様な妖怪がどんどん増えてきたのだ。

最終的には20を超え、とても私一人では対処し切れなくなってしまうた。

だけどこんな所でやられる訳にも行かないので逃げる。逃げながらも撃つ。

だが、集中できずに一匹に狙いが定まらない。

私の能力の欠点は、確実にあてるとは言っても的が複数あると片方に集中しないとあたらないのだ。

なのであの妖怪達の場合は数が多すぎて光線があっちに行ったりこっちに行ったりで、中らない。

そろそろ焦りが出てきた。力が残り少ない。

………？何だろう、霧が出てきた。これは逃げるチャンスかもしれない。まだ終わりたくない。

妖霧の発生には成功した。

そしてこの妖霧は俺の身体の一部として発生させている。身体近くにあるものは何と無く分かる。

……少女は天狗一人一人にレーザーを中てて逃げたな。地味に効くやり返しである。天狗ざまあ。

ふう、然し奴等に俺の居場所はバレたであろう。もう逃げる気力も無い。じっとしていよう。

しかし俺の鎧は一体いつ復活する事やら。

…暫くして数匹の天狗が俺の方に飛んできた。

捕まった。

疲れた後の俺の能力の使い道：後編（後書き）

二匹目オリキャラ登場！

次回に続く！

何処か可笑しな所あったら是非御教えして頂けると嬉しいです。
感想質問ドシドシ下さい。！

俺の予想とは別の方角に……（前書き）

遅れてすいません。

4日間程外せない用事で書いてる暇がなかった（汗）

俺の予想とは別の方角に……

捕まった後俺は何やら屋敷らしき所に連れて行かれ、その地下の牢獄に打ち込まれた。

だがこれは俺に一つチャンスを与えたと言う事である。そう、

「脱獄のなアア！」

「うるさい黙れ」

「断る」

「今此処で死刑にしてやつても良いんだぞ……？」

「やれるもんならな」

「……………」

少々横槍が入ったが続ける。

俺は昔から脱獄がやって見たかった。それも完璧な。人それぞれ完璧の定義は違うであろうが、俺の完璧とは証拠など無く、出て行った形跡も見当たらない様なもの。

捕まって二日目程度だが、それで大体こいつ等の行動、巡回の経路、時間割が分かった。

集団性があり更に行動が一つ計画された物であればあるほど、こういうものは破り易いのである。

だが、それと同時に障害も多い。

俺の他にも何人かが牢獄に入っていたが、そのどれもが既に生気をほぼ失った様な目をしていた。

これに迂闊に近づけばどうなるか分かった物ではない。声を上げられては目も当てられない。

黙れば此処から出してやるという条件で黙らせると言うのも一つの

手だが、それでは此処全体を敵に回したも同然になってしまう。いや既にそうかもしれない。

もう一つは見張りの交代がやけに厳重なのだ、と言っても俺は詳しくないので普通かもしれないが。

必ず次の見張りが来てからその場を離れ、鍵を渡す。そして常に牢から数メートル離れて監視。

更に此処を出た先に在るのがこの屋敷の中心、ホールの様になっている場所の端。出る為には階段を使い階段の出口にはまた鉄格子と警備。

これを越えた先には屋敷の門がありそこにも警備がいる。

……警備員は牢屋がさしてでかくないので一人だが、俺の感覚的にはかなりの数の天狗が此処にいる。見つかったら最後である。

しかし俺の身体を変質させて空気という形を持たせれば、どんなに警戒しようとほぼ無意味である。

序に俺の身体には他人から見ればちゃんと形はあるが、要は気の持ち様である。

俺に形が無いと思えば俺の能力はそれを前提に起動する。

だが、俺の能力はあくまで形が無い物に形を与える能力なので、思い込みだけでは難しい。

この様な条件の時や、俺の妖力に形を与える時に妖力は多少だが消費される。

まあこの他にも俺の能力の面倒な所は多々あるが、それはまた次の機会。

話を戻す。

実に簡単。必要なのは俺の妖力と、それを回復させる為の時間である。

身体の一部或いは全部を空気にする事事態はそこまで難しくはない。だが俺には肝心の気配を消す事が出来ない。これに気付かれて何かしらの方法で捕まりでもしたら……どうなるんだ？見当が付かない。

……とりあえず暫くの間は出てくる飯を食って、それ以外は寝ていよう。目標は早期回復！

あれから二日目。俺の妖力は鎧が完全に元に戻る程度まで回復した。幾らなんでも早過ぎないか？

それとあれだけ綿密に調べておいてなんだが、俺は逃げ出すのは止めた。

別に気が変になったわけではない。ただ俺の処遇がどうなるか気になっただけだ。

見張りによると、俺の処遇は今上の方で話されているらしい。それが明日にでも言い渡されるらしい。偉そうな天狗の言う事だ、大方予想は付く。俺はそれを待つ。

予想は出来ても何が起こるかはまだ分からないので、警戒だけは怠らない様にしよう。

さて、また寝ヨガシヤン。……………んあ？

「先の囚人の処置が決定した。連れて来い」
「はっ！」

おや？もう決まったのか？聞いていたより一日早い。
少し思案したところで牢の鍵を開けてこう言ってきた。

「出る。お前の処置が決まった」

そう言っただけで俺を連れて歩き始める警備天狗。その後が続く俺。

……………こいつが邪魔で前が見えん。っと、いきなり曲がるなよ。背がでかいと良い事ばかりではない。

牢から出されて暫く歩き何となく堅苦しい感じの部屋の前に連れてこられる。

鎧が復活した時は何だそれとは驚きと殺意を向けられたがただの体質だと言ったら納得した。所で体質で鎧を着るのは、可笑しいとは思わなかったのだろうか？

部屋に入って中心に立たされる。広さは普通だが周りには俺を取り囲むようにして天狗達がいる。

そして俺の目線の先には大天狗（？）がいる。フィンキ（変換不可だった）がそんな感じ。

そして大天狗が口を開く。

「お前の罪は我々の領地侵害と他の侵害者の拿捕妨害。これに対する判決は……」

恐らく死刑だろう。天狗とは俺の知る限り（と言っても小説で読んだ位だが）かなり縄張り意識が強く、偉そうな感じの者だと思っている。

さて、判決は？

「死刑、と言いたいが私の意見でこれは無しになった。だが……」
「？」

だが、どうした？と言う目で見てやる。
すると、大天狗は面白いと言った風に若干笑い、俺に真の判決を言い渡した。

「私と戦え」

「焼き鳥にしてやろうか…」

おっとつい本音が。にしてもこの天狗余裕である。にやけでは無く笑っている所と言い。

「私に勝ったら好きにするが良いさ」

「そうか」

焼き鳥が怖くないのだろうか？同種族の筈だが…………。

「では明日の今頃にこの屋敷の前に来い」

「俺が逃げたら？」

「それは無い」

「そうか」

…………… 完全に見透かされている。

勿論俺は逃げる気など無い。こいつを焼き鳥にするその時まで！

冗談はさて置き俺はこいつに勝てるだろうか？はつきり言って自信なし。俺はこの数十年間雑魚としか戦っていないんだぞ。能力と鎧のフル活用と勘が必要だろう。

…………… 努力しよう。

俺の予想とは別の方角に……（後書き）

予想外の展開かもしれません。すいません。

感想、指摘等よろしく願います。

何の為に俺は……………（前書き）

七話

何の為に俺は……

昨日の約束時間まで後残り五時間程度だろう。

今俺は山から離れた所にあつた人里の道具屋で傷薬等を買っている。妖怪に効果はあるのだろうか？

久しぶりに牢を出た俺はあの後直に飛び去った。

飛び去ったと言っても妖力で薄く頑丈な布を作り、取っ手をつけて少しジェットで飛び上がった後、滑空すると言う微妙に原始的な方法を使った。……というか今のこの世界の時代が原始か。

滑空自体はそこまで難しくは無かったが、飛び上りが物凄い勢いなので慣れるのに一苦労した。

その飛んでいる途中見つけたこの村で食事（人を食った訳ではない）を済まし、少し遊んで外に出てまた帰ってきて、現在に至る。

他から見れば時間が無駄だとか言われそうだが俺にとって遊びや食事は生きる理由である。

して一日分の生きる理由をやり尽した俺は約束を守る為に、山に向かっている。

妖力は普通に万全。準備は万端である。

さて、どんな戦いになるやら。

「やっぱりいるかぁ……」

約束通りの時間。非常に面倒だが約束は約束である。
屋敷の前にある影に対して愚痴を垂れつつ、俺は布を妖力に再変換
《戻》してその場に降り立つ。

「逃げずに此処へ戻ってきたその勇氣、褒めてやろう」

「わー褒められたー。嬉しいなー」

「ワザとらしいな」

「ワザとだもん」

「……………」

大きく溜息をつかれてしまった。昔の…現代に居た頃の癖が抜けき
つていない。

まあそれは置いといて、

「それよりも、お前こそ良く逃げずに此処へ来れたな」

「……………どういうことだ？」

「……………お前は今年で何歳だ」

「23」

即答か。もう少し躊躇っても良いんじゃないか？いや意味は無いが。此処で1つ。妖怪は普通、時を経るごとに強くなり妖力が増加する。それは恐らく俺にも適用される。だが俺の周りの奴等は殆ど俺を雑魚と勘違いする。それは何故か。

俺の妖力は全て鎧の内側に蓄積されて行くからである。

俺の鎧は妖怪と同じく時を経るごとに強度が上がり、色が鮮やかになり、光沢が増えて（？）いった。

そして俺の鎧の中は俺以外誰も見る事はできない。感じる事さえもできない。

俺の妖力は俺が意図的に出す以外に、出て行くことは先ず無い。そして使い切ってもある程度回復すると鎧が先に回復する。この時から既に俺の鎧は妖怪の攻撃を防げる程度の硬度を持っている。何時でも安心をくれる物が傍にある事はいい事だと俺は思う。

「じゃあ始めようか」

「随分と余裕だな」

「別に偉そうに言うつもりは無いが……………」

そう言っ一本の巨大な槍と盾を出してこう言った。

「お前に本当の恐怖を味合わせてやる……………」

「その鎧の隙間から見えるその目。昨日とそっくりだ」

「フッ」

何となく変な笑い方に聞こえるかも知れないが、これが俺のデフォ

である。鼻で笑うのは他人を不快にする事があるというが、俺はそうは思わない。なにしろ俺がそう聞こえないよう努力している。

BGM【Mr.Liar〔<http://www.youtube.com/watch?v=GlHYbv1ZTDM&feature=related>〕】

つと、戦闘に集中しよう。

「ッ！」

ビョウン！と風を切る音がする。俺の槍が大天狗の居る所を、いや居た所を切り裂いたのだ。

それと同時に後ろに気配を感じる。流石だ、速い。

「ハッ！」

「……」

ガキャン！

俺の盾と大天狗の何時の間にか持っていた刀がぶつかり合う。

「そうっ、言えばッ！まだお前の名前ッ、聞いてないな」

「こんなッ！時にッ、悠長な！」

ギイーン、ビシイーン！

槍と刀が削れ合って不快な音になる。

「ッ！」

「響ッ！だあ！」

「そう、か！いい名前じゃあ！ねえつか！」

会話しながらも既に17発ほど攻撃を防いでいる。

……これは消耗戦だな。

響はスピードで俺に勝り、体力を削っていく。

逆に俺はあいつの攻撃を防げるだけ防いで無駄に消耗させる。機会があれば反撃。

「隙ありッ！」

「それ言っちゃお終いよぉ！」

ガッキャァン！

後ろから来た刀をギリギリで止める。隙ありと言ったら、絶対分かるだろ……。

ブォオン。

中らない。

シュン！

徹らない。

「どうしたあ！動きがッ、遅くなってるぞ！」

「放ってッ、置け！」

ガン！

響の攻撃が俺に一発徹る。いつの間にもう一本の刀を出していた。

「無策に武器を振るっても何も起きんぞ！」

「うるせえ！舐めんな！」

思いつきり槍を振る。

それを予測していたかの様に避ける響。馬鹿め何の意味も無しに俺

が槍を振るものか。

ドツガアアアン！！バゴオオオン！

「なっ！？」

「誰が無策だつて？」

ブービートラップ。警戒心の沸かない物に何かしらのアクションを起こすと発動する罠。だった筈。

今回俺が仕掛けたのは響の避ける先にあつた木と木の間。普通に糸に引っかかると発動する。

罠の内容は実に簡単。天狗ホイホイである。Gを捕るのに使われるアレの巨大化バージョン。

動きの止まった首に右手の槍と左手の盾に入っていた剣を触れさせる。

「……何故止めを刺さない」

「刺して俺に何か利益があるか？」

「焼き鳥にするんじゃないのか？」

「……本気か？」

「？」

「……何かとても悪い事をした気がした。いや分からないが。何と無く。」

てかなんでこいつはよく分からないといった顔をしてるんだ。

「まあいいや、んじゃ俺は好きにしていいいんだろ？」

「？ああ、そういう約束で始めたんだしな」

そうだったのか。

「んじゃ、また来るわ」

「えっ?!」

えっ、て。

「じゃーなー」

「待て!」

「何だよ」

「お前は今年で何年になる?」

「44」

「最初から私の負けではないか」

「まあ、んじゃーなー」

「はあ……………」

その後久々に湖に帰って気がついた。

「目的忘れてたああああ!!」

何の為に俺は……………（後書き）

二話のタイトルのダークロードって部分あるじゃないですか。アレの由来は、『ファーストクイン?』というPS1のゲームで、出てくる職業(?)の名前です。『ファーストクイン?』の実物は今は何処で売ってるかは分かりませんが、プレイステーションネットワークでなら確実に売ってます。

面白いので是非皆さんもやってみて下さい。

でわ、感想、指摘などよろしくお願いします。最後会話だけになっちゃった。

眠いときは寝れば良いと思うよ！（前書き）

八話。

そついや大天狗こと響で三匹目オリキャラ登場！

眠いときは寝れば良いと思うよ！

あの叫びから一時間もしない内に俺は再び山に向かって歩き出し……てない。飛び始めた。もうね、正直言つてめんどい。眠い。アレからまだ一睡もしてない。腹も減った。何も食ってない。更には武器元に戻したら全然妖力返って来なかった。

そんなもんだから今俺は大変疲れている。………そいうや響捕まえる為に作った天狗ホイホイ消し忘れた。大丈夫かな。あいつ。大丈夫か。そうに決まってる。

自己完結したは良いが、意識が持ちそうに無い。眠くて。

そこら辺で降りて一旦寝るか。

「どいいたのかなあ」

私は今探し物もとい探し者をしている。

この前の霧は明らかに妖力が含まれていた。意図的に出した可能性のほうが高い。霧を出す妖怪なんて聞いた事ないが。その妖力の質を基にして探しているのだが、中々見つからない。助けてもらった日を除いてもう探し始めて六日目だ。

「どっか行っちゃったのかなあ」

だとしたらもう見つけようが無い。

それとあの時私を襲った妖怪は天狗と言うらしい。何でも偉そうで縄張り意識が強いとか。

それであそこはいつの間にあいつ等の縄張りになったのか。一言ぐらい掛けて欲しい。

にしてもみつからない。妖力の質は分かっているのだが、肝心の続きが分からない。

途中で途切れているのだ。まるでそこで『無くなった』かのように。

「またきてくれるかなあ……」

なさそうだが、一応呟いてみる。

そもそも何で助けてくれたのだろうか。通り掛っただけなら助ける義理も無いし……。

私の知ってる妖怪？それはない。

今まであんな質の妖力は感じた事が無い。限りなく土や石に近い感じだった。

さつきから質、質といっているが、これはそれぞれの特徴の様な物である。

私の妖力は光に近い。天狗なら、恐らく大体が空か雲だろう。

質は必ずしも物質に依存するとは限らない。魔に近い物も居れば、闇や影といった空想上の物、木や太陽（これらは空想上ではないが）など様々なものが存在する。

……………気のせいだろうか。今近くに何か落ちた気がする。こんなくらい時間に、鳥は飛んでいない筈。

誰だ？

「つてえ……………」

墜落した。二回目だ。俺は飛ぶセンスが無いのだろうか。まあいいや。

……………つくづく思うがこの鎧は何故こういう時に限って効果を發揮しないのだろう。疑問だ。

取りあえず布を消して立ち上る。

相変わらず眠いので何処か寝られそうな場所を探そう。暗いが妖怪になってから随分と見え易くなった。夜行性の妖怪だからだろうか

？なら何故寝る時間帯は夜？俺だけか？特に危険を感じなければ普通に眠いんだが。

所で、俺が捕まって出るまでに四日。一日間の外出。戦って今に至り、今は大体6日目の午前3時程度。そして昨日と今日で合わせて睡眠時間は0。更に昨日（約4時間前？）は戦って疲れている。

くっ…………もう無理だ。しつこいが眠すぎる。木にでも寄り掛かって寝よう。

あれ？このパターン前にも無かったか？

あ、いた。

これがさっき落ちてきたモノ？人…………じゃない。

「…………？」

突付いて見る。

カン。

！

これだ。触らなかったから分からなかったけど、中にこの前の妖力と同じ、土や石に近い質の妖力が信じられない程入ってる。やつと

見つけた。

……でも、ねてる？

寝てちゃ話ができない。私はこの前のお礼と話がしたい。

序だ。私も寝てしまおう。今日一日探しっぱなしで少し疲れた。

私はすぐ起きてしまっただろうけど、一応浅い眠りについた。

眠いときは寝れば良いと思うよ！（後書き）

反省点：短くてすみません。

数字が漢数字だったりローマ数字だったり数字だったりハッキリしなくてすみません。

今回オリキャラ二人目のサイドが沢山ありました。いやゝ性格考えるのって以外に大変ですね。

感想指摘などお願いします。

なんだっ たんだ？理由が分からん（前書き）

九話

なんだっただ？理由が分からん

今は何時だろうか。気になって手首を見る、…………と違う違う。今は腕時計なんて持ってない。

辺りは真っ暗。だが俺の身体は快調。この前みたいに力が底を尽いた訳ではないので、普通だ。

寝起きの伸びをする為に立……………とうとしたが、膝になんか乗っかっていて、立とうにも立てない。
なんだ？

「……………」

膝を見ようとしたら、目の前に猫耳が現れた。なんだこれ。引っ張ってみる。

「ひゃっ」

……………所でこの毛の色、どっかで見た事がある気がする。どこだっけか。この、言い表し様の無い色、薄^{だいたい}橙色、か？ちがうか。？
って悠長に分析している場合ではない。

なんでこんな所でこいつは寝てるんだ。俺に知り合いは妖精位しか居ないぞ。あと響。

だが俺に面識の無い奴ならこんなに警戒心なしで俺で寝る奴は居ないだろう。

一体どこで……………。

と、動かずにそんな事を考えていると、猫耳が起きた。

「にゅ〜……おはよう」
「おはよう」

取りあえず返事はしておくが、これで良いのか？
どうでもいい、いや良くないがこんな所誰かに見られてないだろう
か？変な目で見られる気がする。

「ねえってば」

「…ん？ああ、ごめん。なんだ？」

「あなた誰？」

「……………」

如何に、対応すればいいのだろう。寝てたら何時の間にか俺の膝に
座って寝ていた猫妖怪に、一体…。こんな事初めてだ。恐らく大半
の人《妖怪》はそうだろうが。

「え〜……………」

てかそれ以前に。

『誰？』

名前の事だろうか。だとしたら俺は答えられない。名前が無いから。

今此処で俺が俺に命名するか？微妙だな。まあいいか。

「……………藍賀」

「あいが？」

「ああ」

藍賀、と言うのは別に何が由来な訳でもなく、ただ今思いついたか
らである。

……うん。自分で忘れない様にしよう。

「ねえ藍賀」

「ん」

「何でこの前助けてくれたの？」

「この前？…ああ」

この前。妖霧を出して助けたはいいが捕まったアレか。助けたと言つか、気に入らなかったただけなのだが……

「別に、通り掛っただけだ」

「通り掛っただけで？助ける義理なんて無いのに？」

「義理が必要かどうかは俺が決める。今回は必要なかった。それだけだ」

「……………」

なにやら驚いた様な表情をしている。そんなに珍しい事なのだろうか？

「珍しいか？」

「うん」

珍しい事らしい。おっと、そろそろ行こう。別に時間は無駄にしてもいいのだが、膳は…善は急げだ。

「んじゃ俺はそろそろ行く」

「何処に？」

「人探しをしてるんだ」

「どんな？」

「ん…俺が聞くに光を撃つ奴らしい」

「へえ……ってそれ私！」

「へ？」

え？これ、と言っでは悪いが、これが？

うーん、……………ああ！そういえば！

こいつが逃げる時に確か光線を撃ってたな。

「ああ、てっきり忘れていた」

「？」

「いや、なんでもない。所でだが……………」

「ん？」

「その、光を撃つってどうやってやるんだ？」

「光？」

恐らくこれも俺の鎧と同じ原理。妖力の収束体なのだろう。だが、俺には撃てなかった。ただ単に想像力が足り無すぎるのかもしれない。妖力の扱いは感覚でやる物だと何処かで聴いたことがある。だが、上手くいかない。そもそもアレは能力で撃っていたのだろうか？それは無い。実際東方のSTGでは誰でも普通に光線を撃っていた。筈。良く覚えていない。随分昔の事だ。

「うーん……………私は殆ど能力で撃ってるから良く分からない」

「……………そうか」

「あ、でも多分普通に撃てると思うよ。私だって初めの内はそうやって撃ってたから」

「どうやって？」

「なんかこうね。収束させるの。私だったら手の平に収束させて撃ってる」

「……………」

収束。手の平。収束。撃つ。
手を空に向けて集中してみる。

収束。手の平。収束。撃つ。
収束。手の平。収束。撃つ。

収sシュウン。？

「おめでとー。態々私の所に来る必要無かったんじゃない？」
「……………？……………」

あれ？今手からなんか出た？おめでとー。ってことは成功？なんで？急に。

今まで全然反応しないもしくは煙が出て火傷する位だったのに。
目を瞑っていたから分からなかったが、

「何色だった？」

「へ？」

「光、光線」

「赤と黒」

「……………」

なんだろう。それが俺のテーマカラー？赤と黒が。まあ好きな色だから良いけど。

「所でお前さんの名前は？まだ聞いてなかったろ？」

「私の名前？」

「ああ」

「名前名前……………村では光って呼ばれてるけど」

「光？」

「うん」

光……名前とその他色々について今度考論して見ようと思う。

「分かった、光か。んじゃ今度からはそう呼ぶ」

「ん」

「それと俺はまだ微妙に寝たり無いから寝る。お前は村に帰るのか？」

「うん。多分皆待ってるから」

「そか」

「じゃあね」

「じゃあな」

そういつて見えなくなるまでその方向を見て暫くしてからそこでまた横になった。

なんだったんだろうか。俺が撃てなかった理由。

なんだっただ？理由が分からん（後書き）

じゃっかん思考内での喋り方が色んな場所で違う気がしないでもないですが、そこはまあ気にしないで下さい。リクや指摘があつたら変えます。

でわ遅くなつてすみません。感想指摘など宜しくお願いします。

数日前にもこんな事があつた気がする（前書き）

遅れて申し訳ありません。

いろいろあつたですよ。色々。

まあ気にせんで最新話をどうぞ

数日前にもこんな事があった気がする

さて、レーザーの撃ち方は分かった。だが俺が知りたいのは実はそこじゃない。

この鎧の解き方である。

不便ではないが不便なのである。廃棄物が出ないのが唯一の救いであって、顔が見えない。他人から若干距離をとられる事がある。等の妖生に関わる重大な欠陥がある。

邪魔な訳では……まあ邪魔だが、そうではない。必要な時意外必要ないのだ。それなのにこいつは何時までも俺の身体に張り付いたまま取れない。

そもそもなんだよ。なんでそんな関節と関節の間まで嚴重に防御するんだよ。てか態々軟質軽金属を使ってまでそうする必要性はあったのか？まあ使われているのは俺の妖力だが。

まあ今起きたばかりなので、余りいい案は出てこない。だが然し、これは今直ぐにでも解決したい。

……そういえば何で途中途中急ぐ必要は無いなんて思ってたんだろ
うか？急ぐ必要性大有りである。上で話した通り。

今思い出したが、響との戦いの前に買った傷薬は如何しようか。一応塗り薬と飲み薬が……あれ？今の時代こんなのあるのか。知らなかった。……ゲフンゲフン、飲み薬があるのだが既に俺の傷は完治している。と言うか傷そのものを負っていない気がする。念の為に思
って持って置こうか。使えなくなる前まで。使えなくなったら飲んでしまおう。塗り薬も（笑、えないかもしれない）。

腹いてえ。最近何も食ってない。また捕まりに行くのも良い案だ。いや良くない。なんで今良いとか思った俺。

とは言ったものの（言ってないが）、腹が減ってはそもそも動けない。動かない。動きたくない。

「腹減った……人は…食ったら負けな気がするなあ。如何するか」

一旦無理して湖まで帰って釣りでもするか。妖精が釣れそうだ。そんな時はそいつを喰お…ゲフンツ、食おう。

どちらにしてもさして変わらんが。

「死んD A -」

「元気じゃないですか」

「俺は死んだって言ってるのにイイイ！」

「ほええ」

横たわりながらほざく俺。近くにいた妖精が話しかけてくる（この前の奴だ）。なんだ、何処を如何見たら俺が大丈夫に見え……見えないのか。しまった。

そついえば釣り餌が無い。こいつで言いか。

のっそりと立ち上がる俺。そして、

「とおう！餌確保！」

「ぎゃああ！止めて！食べないで！」

「食わない食わない。釣り餌にするだけだから」

「お魚さんに食べられる！」

「気にするな。俺は気にしない」

「いやあああ」

まったく。食わないといっておろうが。騒がしいやつちゃのう。

……こちらでふざけるのは止めておこう。無駄なエネルギー消費に繋がる。もう繋がってるか。

何時までも掴んでるのは悪いので放す。

「ふう」

「はぁ……今夜も飯抜きだ」

「ご飯なんて食べなくても人間を驚かせれば少しは回復するんじゃないんですか？」

「驚かせる？」

「はい！近くにいい所がありますよ。案内しましょうか？」

「んああ、頼む」

驚かすだけで腹が膨れるだろうか？常識的に考えたら否だ。いや、妖怪の常識から考えたらそうなのかも知れないが、少なくとも人間

からしたら異常だ。

そもそも妖怪が存在する事自体前世の俺には異常なのだ。異常で出来ている筈の世界の中で異常が通らない筈が無い。

さつきから異常といっているがこれはあくまでも、非常識と言つのがダルいだけである。

非常識とは公になつていない常識を指すものと俺は思っている。なのである意味これも常識の範疇なのだ。多分。

要するに非常識で出来た世界にとって常識は異常、或いは意味を成さないもの(？)。非常識こそが常識なのだ。

と、たらたらと同じ様な事を考えていた様な気がしながらも、妖精の後ろについていく。

そういえば、こいつの羽は他のと比べて大きく綺麗で、淡い青色をしている。何故だ？

「ここです」

「っと、こりゃあまた、随分とまあ」

「？」

小さな村ですね。と、声には出さずに心の中で呟く。

仕方ないだろう。だって家が五件ぐらい建っていて、その中の一つが微妙にでかいだけで、それだけだ。

確かにこれなら出来ない事は無いだろう。

『はじめてのおどかし』

とか言うタイトルがつきそうである。

「いいですか？ああやってちよつとふざけて出てきた子供や、それを連れ戻しに来た親に向つて『飯いい』と呟くだけです」

「はあ……」

驚かすのは至つて簡単な要である。他の奴に見つからなければ。

これ位俺でも出来るのではないだろうか。てか出来なかつたら俺妖精以下か。

「夜は危ないから出ちゃ駄目って何度言つたら分かるの!？」

「だって夜も朝も妖怪が攻めて来たら変わらないじゃないか!なんで夜だけ駄目なんだよ!」

「駄目な物は駄目です!早く戻りなさい!」

アレは良くない。あの言い方は。特に母親。

大人は子供に何を言つても聞かないから、取り合えず力で如何にかしようと言う奴がいる。だがそれはいけない。

ちゃんと理由を説明すればアレ位の年になつたら分かるだろうに。それを何時までも子ども扱いしてあんな対応をしているから、反抗

期等と言つのが出来てしまつのだ。

然し子供も子供だろう。

年に關係なくアレは唯の我俣だ。夜に出る理由が無いのに出るのは俺たち妖怪に食つてくさいと言っているのと変わらない。

しかし確かにそうだ。朝だろうと夜だろうと妖怪が出てきたら同じ事だ。

実際、

「お前の魂戴くよ！」

「よ、妖怪、？だー！」

「きやああああ」

出てきている。目の前に。

揉め合っている間に妖怪が来るとは思わないのだろうか？……愚問か。

……ん？おお？

結構な量何かが回復した気がする。HPとかMPとか。

しかし、良くこれだけで此処まで回復する物だ。素晴らしいじゃないか。

と感動していると横から声を掛けられた。

「そろそろ帰った方がいいと思います」

「なんでだ？」

「人間が集ってきています」

「ああ」

そういえば。

「よしじゃあ戻るか。これで暫くは困らない気がする」

「私たちでも月に一回は来てるのに、そんなんじゃ消滅しちゃいますよ？」

「……………これから定期的に来よう」

久々に命の危機を感じ取った。

所で妖精でも月に一回は来てるのに俺はこれが始めてだ。なんで今まで生きて来られたのだろう。

俺は詳しく知らないが、矢張り妖怪と妖精は違うのだろうか？

なぜ俺の鎧は変換どころか反応すらしないんだろう。

さつきからこの前みたいに念じているのだが、全くと言っていい、と言つか全く反応する気配が無い。正直科学《化学》の実験でもやっている気分である。

俺だって自分の顔ぐらい見てみたいし、マトモなコミュニケーション位取りたい。

……こいつが無かったら死んでいた様な事は何回あっただろうか？覚えていない。記憶に御座らない。

そういえば妖怪は高い所から落ちたぐらいで死ぬのだろうか？俺の予想だと少なくとも地上から1000mぐらい離れていても普通に着地出来るのではないだろうか？下にある物にもよるが。

そんな下らない事を暫く考えていたら、突然後ろの方の茂みがガサガサと揺れた。
何だろうか。

気になって近づいてみる。

しかし俺にそんな事をしている暇は無かった。なぜなら、

「うにゃー！」

「のうえ！？」

茂みの動きが止まったと思ったら、木の上から猫が飛び降りてきたのだ。

落ちても問題ないと思いその場で止まる。猫は着地が上手いのだ。

「ちょ、止ましないでこっち来て！ヴニャ！」

着地失敗。お前猫だろ。てか喋ったし。

「その声は……光か」

「止まんないでよー。肩に乗ろうと思って木に登ったのに」

「悪い」

どうやら俺の肩に乗るつもりだったらしい。どちらにしろ俺の身体は金属に近いので滑って落ちると思うが……。
一言言ってくれば止まったのに。
さっきは止まれなかったが。

「で、久しぶり」

「昨日ぶり」

だった筈。何だろうか。微妙に今日は眠気が覚めない。頭の回転が悪い。

「ところでさ、聞いた？」

「？」

「人間が凄い事になってるんだって。見に行こうよ」
「へい？」

数日前にもこんな事があつた気がする（後書き）

前回の話とか余り見直さないのでも少々可笑しい所あるかも。

感想指摘宜しく願います。

結局やる事は同じなのか…？（前書き）

虫歯になってしましまして……あたたた。

歯医者行くにも金が無いし、「正直疲れますわ〜」的な？w昨夜さん風に。

後、自分テイルズ大好きです。まだエクシリアしかやって無いけどとりあえずクリアしました。時たまネタとしてや設定として良く出てくると思います。似てるのが。

序で最近遅い言い訳を言いますと此処最近ネットに全然繋がられなくなってしましまして。

書く時間はあっても投稿する時間が無いと言うか。まあそんな感じですよ。

CP部もなんか行ってない内にネット事故ってるしで…もう大変。

でわ最新話をどうぞ。

結局やる事は同じなのか…？

まあ、見た感じは明治時代程度だった。随分と早い時代進行である。確か東方の二次創作に良く出てくるパターンだ。

自分一人だけ戦いに行つて死にかけたり、皆で戦つて一人だけ残つたり。俺もそんな道を歩むのだろうか？

まあだとしたら如何と言うわけでも無いんだが、正直めんどくさい。何がと言うとそれは数が多い物を相手にするのが、である。群れて寄つてたかつてレーザー銃を撃たれるのは勘弁である。痛くは無いが。多分徹らないが。

というか、戦車とか持つてこられたら恐らく戦いにならない。俺が遠くに吹っ飛ばされて終わりである。ばいばいきーん。今度衝撃吸収スポンジでも作るか。

……と、如何でもいい思考はここ等にして、

「腹減つたのおう」

「何も食べて無いからじゃない？」

「ですよー」

「……………」

腹減つた。

ついこの前行つたあの村だが、……………なんと言つべきか、こつ、あの後また行つてみたんだが、うん。

無くなつてた。

いやゝまさか一瞬間の間にして無くなるとは思いもしなかった。
まあ形ある物は何れ無くなる。それがその時だったってだけの話さ。
フツ。

…んでま、俺はその後別の場所を探して時たま動いてるんだが、無意識のうちにまた元の場所に歩いて戻ってきてるんだよ。

いや別にただ歩いていたらそうなる訳なだけで、いつもいつでも無意識の内にそうなる訳ではない。これ重要。

とつらつら思考してた訳だが、どうした物か。明治都市に潜り込んでもいいんだが、あの時代の文化は余り好きではない故、行きたくない。

何が好きではないかと言えば、あの微妙な車といい、適当なレンガ造りの家といい、………e t c.

………はあ。できれば早く未来都市になって欲しい。俺の欲しい物があの時代にならんと手に入らん。I p h o n (?) とか、ノーパソとか。

充電は困らないし、意外とその辺りの知識は持つてるつもりだが今の時代では宝の持ち腐れである。

「はあ………」

本日二度目のため息をついて、隣にいる光に声を掛け寝る俺であった。

時は経って132年。

中途半端かつ細かい年数が過ぎた今、俺たち妖怪と人間共の溝は埋めても埋め切れない程深くなっていた。

簡単に言うとな両者共に姿を見つけ次第、「チツ」見たいな感じである。喧嘩番長みたいに挨拶すれば直るみたいなモンでは到底なかった。

まああいつ等が幾ら溝を深めようと俺にとっては如何でもいい話だが。そもそも何か愛着があるわけでも無いしな。

あ、そうそう。それと俺の中身が分かったぞいな。

予想通り人の形は取っていた。が、あくまで形を取っただけで完全に同じではなかった。

まず、羽が生えていた。それも蝙蝠こうもろうの様な。

だが、蝙蝠のそれとは多少形が変わっていてまるで真・ゲターロボのような羽だ。翼と言った方が良いのだろうか？どうやって今まで鎧に入っていたのだろうか？

でもって他の場所。

腕に腕輪が着いていた。取れなかった。……………でこの腕輪が手首ら

辺まであり、その先が形を成していなかった。

無い訳ではないのだが何か淡い青の見た感じ液体っぽい物がユラユラ揺れているだけで、意識しないと触れないし形を成さない。便利なのか不便なのか…………。

後容姿についてだが、これは色が変わったただけだ。上の変化を除けば。

髪が前よりもぐしゃぐしゃになってテイルズ・オブ・ジ・アビスの主人公ルークに似た髪形・髪色になっていた。…………今更だが余計な事ばかり覚えていく気がする。

そして身長は169・4位。上半身下半身共に丁度いい感じの身体だった。

力は言うまでも無い。記憶力は…………俺は気にしない。と言うか確かめ様が無い。…そもそもこれは中身が分かった事とは関係ないな。

また別の場所。

足の方は腕とは違い普通だった。爪が鋭かったり異常な程の脚力を有している所以外は前と同じである。

まあ精々こん位か。

別に驚くほどの事ではない。ただ変わったただけの話。前の容姿に戻りたいとは思わない。

それよりも、だ。

別に俺の容姿は如何でもいい。なら話すなどと言う話だが、知った事ではない。気にするな俺は気にしない。

人間が矢鱈凄いい事になっている。既に萌え文化が出来ている。

そしてそれだけではない。

小さな巨大都市な為、空飛ぶバーゲン宣伝用の飛行船や普通に高い電波塔などもある。

此処で最新のノーパソとその充電器。更にゲーム機とかも色々パクって行こう。

俺の盗みの心得は108式まであるんだぜ？

「ねえなんで私まで来てるの？」

「おみやあがついて来たんだろおが」

「へへへ」

「……………」

……………。

さて今俺は人間の都市に来ている。理由は色々盗みに来た。

さてどうやって盗んでやろうか。

一番簡単なのは俺の能力で金を作る事だが、生憎俺はそこまで古風じゃない。

前世でも恐らくそうだが金一つ一つにはシリアルナンバーが振つてある。さっきの店の客の払っていた金を同じ物を作り確認してみた。これだけ技術が進歩しても金だけは完全に電子化されないのは、さつき俺の言った『金を作り出す』事を出来なくしているのだろう。たかがこれだけの広さの場所でもここまで厳重にするのは矢張り、金は重要な人間の動力。一部には生きる証の様な物だからだろう。だからこそ己が動力。皆の活動を停止させるような事はしないのだろう。……要は金があれば働く奴等に金を作り出す手段が出来てしまえばそいつ等は働かなくなる。そうなれば社会全体が活動を停止し、その社会は死ぬ。それをさせない為だ。

何を熱く語っているんだか俺は。

まあそんなわけで金を作るのは没。働くのも没。何故かって？俺は人間じゃないからさ。あいつ等の役に立つつもりは一ミリも無い。造銭場を勝手に使うのも没。モノを盗むのは採用。

………待て。結局盗んだ事がばれれば追われるのだから、金も別に偽造でも構わんのか。
何故そんな事に気づかなかったし俺。

ジュー

「……………」

俺は今、無言でポテトを揚げている。

何故かって？そこにポテトがあるからさ。……………嘘だつて。だからその重たそうな石をゆっくりと元に戻せよ。こんぐらいで怒るなよ……あ、ちょwやめアー……ッ！

ふう、……実は仕事を始めたのである。さっきまで役に立つつもりは一ミリも無いとか言ってたくせに。何の気の迷いが……。

まあそれはいいとして始めた仕事と言うのが、

「お待たせしました。店内にしますか？それともお持ち帰りですか？」

「持ち帰りです」

「畏まりました。メニューは……………」

某マック店（飯）である。始めたばかりなので名前などはあまり覚えていない。

いやついさっき此処の飯を少々摘み食いしたのである。そしたらこ

れが中々に美味かった。

そんなもって此処なら別に働いてもいいだろ。前も（前世）似た様なモンだったし。

…というわけで此処で接客&ポテト揚げ&雑用をしているわけである。…普通に雑用って呼んだ方が早かったか。

てかこれ最初の目的と随分、というか全部違うんだが……何故。

「さあ？」

「ん？」

「……」

「………何故居るし」

「駄目？」

「………」

別に駄目ではないのだが、なんでここに居るのが聞きたい。

当初如何しようか迷っていた俺はとりあえずその日は帰ったのだ。

こいつを連れて。

して後日再び此処に来てバイトを始めたわけであるが。

まあいいや。何でも。いてもさして変わらんだろう。騒がなければ。

そついやそろそろ『イベント』の開催予定日だ。準備しなくては。

結局やる事は同じなのか…？（後書き）

さて、結構遅くなりました。東方妖限騎。

このペースで行くと暫くは月刊と化してしまいそうです。残念。
前書きでも書いたようにネット環境が著しく減ってしまいまして。
頑張って繋ぐ様にはしているのですが、いつ繋がられる事やら。

前の三日置き更新に戻りたいもんでさあ。

評価や感想質問アドバイスよろしくお願いします。

文明はそう簡単に滅ばない。（前書き）

つい最近デュエマはじめました。

今まで何だかたかがカードに金を掛けるなんて……とか思っていたんですが、始めて見たらこれが以外に面白い。ハマってしまいました。

然し、小説を書くのも読むのもカードで無いゲームもメールも全部自分の趣味なので、忙しくて仕方ないです（笑）。

でわ最新話をどうぞ。

文明はそう簡単に滅ばない。

まっさかあ。こんな事ってあるんですか。

……ゲフンゲフン。気にしないでくれ。ただ今回ばかりは驚きすぎて可笑しくなったただけだ。

自分の事より驚くとは自分でも吃驚だがまあ今はそんな事は重要ではない。簡単に言うと如何でもいい。

バイト先が無くなっていた。

……下らないと思うだろう？「別にバイト先なんて幾らでも在るんだから良いじゃん」みたいに思うだろう？

ないんだよ。

良く分からないと言った所か。だろおねえ。だが大体予想は付くだろう。少し違うと思うが。

これだけ回りくどく言って置いてなんだが、実の所多少力を付けた馬鹿野郎が街に喧嘩売ったのだ。

その結果、街に不満を持っていた妖怪達も一緒になって戦い始めて戦争に発展。両方とも壊滅状態。幸い両者共に全滅までは行かなかったが、殆ど同じである。

俺は観戦状態。途中で負けを悟り逃げ帰ってきた喧嘩大好き君（喧嘩売った奴）は俺が八つ裂きにした。理由は俺の予定を狂わせ、仲間を死に追いやった責任と言う奴である。

大勢の仲間が死んだ。人間は敵でも味方でもない。（向こうは思い

っ切り敵と認識しているだろうが、大勢死んだ。目測で10分の2程度しか残っていない。

妖怪は人間の小汚い戦い方によって俺以外は見当たらぬ。光も何処かに行ったままだ。

然し、まさか街全体に超高压電流を流すとは思ってなかった。御蔭で動けなくなった奴は全員レーザー銃、戦車、戦闘機、街壁のトーチ力によって殺された。

因みに妖精は殆ど残っている。こいつ等は興味が無かったようである。争には参加しなかった為だ。

……やるせねえ。

残りの人間は月に行く奴等以外皆殺しにする必要がある。毒ガスやハンターでも寄越されたら面倒だ。どうせ奴等大半が地下シエルターで隠れてやがる。俺がいる事も生態センサー等で分かっているだろう。或いは気付くだろう。

妖怪は幾らでも沸いてくるが、人間は……幾らでも沸いてくるか。さして変わらんぬ。

今度、月移動用のシャトルの全貌を見てこよう。それで大体人間の戦力が決まる。最重要機密も漁って見るか。

……何時の間にか驚きや寂しさが消えている。これも妖怪の質^{たち}か。

つかつかとコンクリートの上を靴が歩く、性格には靴を履く生物が歩く音がする。

「にしても早えよな」

いわずもがな俺である。

さて、何が早いかなと言えばそれはこの街の修復の速さと戦力の回復の速さである。

一度発達した文化はそれを発展させたモノがその場所から完全に消える以外に無くならない。

此処もそうであり、山も同じく。

山とは例の天狗達の屋敷のある山である。

あそこにはまだ少数の天狗が残っており、屋敷も健在である。

…流れ弾で多少ぼろくなった物の。

俺達のいた森は既に火の海になり炭と化している。そうで無い場所でもガスや火薬によって非常に住み難い場所になってしまった。

ほぼ人間の化学兵器の乱用である。

人とは恐れる物を何でもかんでも過剰な力で対処しようとする。焼かれた森は何も住んでいないようなごく普通の森だったと言いつのに、住処を荒らされた事に多少なりとも怒りを覚えたが、俺が一人で怒りを覚えたところで何も変わりはないので抑えて置くしかない。

「此処か…」

今最もこの街の中で人口密度が高いと思われる場所。そう、

「シエルター………」

「でっけえなあ」

今俺は地下へ続くエレベーターを使い降りて来た所である。
然し降りている途中から見えていたシャトルが以外にでかった。

と、そんな事は如何でもよくて。

別に此処に来て何があるわけでも無いんだが、取り合えず全貌を見たら管制室にでも行ってみよう。今は丁度深夜で、人もいない。
が暗い分足元に注意しなければ。このシャトルでいっぱいになった空間では飛ぶ事すらできない。というか飛んだら色々と被害が出る。

……？シャトルの向こう側 丁度管制室 がやけに明るい。
誰かいるのだろうか？

明かりの原因を見に行ってみる。

すると管制室の強化ガラス（の筈）の向こうでCPUの画面が光っているのが見えた。

朝の調節か何かでつけっ放しで帰ってしまったのだろうか。まったく、画面に焼きついたら如何するのだ。大体の液晶画面は焼きつくからな。種類は覚えていないが。

と後ろから足音。即座に気配を消して、影に溶け込む。因みに俺の場合、本当に溶け込んでいる為影を見ても肉眼で俺の姿は捉えられない。

此処の床は何故か大理石で出来ている為足音が遠退けば分かる。が、

如何にも隠れる前から俺の姿は見えていた様で。

「出て来なさい」

誰か知らんが俺の方を直視している。これは今でも俺の姿が見えて
いるに近いな。或いは見えているか。サーモグラフィーか？熱
は消した筈だが……。

取りあえず能力を解き影から出る。そして俺の居場所を見破った本
人の顔を見る。

髪は銀。服装は白衣。その下に私服。年は見た目20位か。

「何で分かった？」

「その垂れ流してる妖力に聞いてみなさいな」

「？ああ、そいやな」

呆れた様な顔をする目の前の女性。

そういえば妖力だけ隠すのを忘れていた。矢張り俺に潜入は向かな
い。潜入ではないが。

…然しこの顔どこかで見た気が……。

「何で此处に居たの？」

「何で、と聞かれてもな。ただ此处に来たから此处に居たんだ」

「そうじゃなくて、……はあ、まあいいわ」

「そおか」

「……………」

……今の俺の顔はどうなっているだろう。

とそんな事は如何でも良いのだ。目的は他にある。

そう思い歩き出したとき後ろから銃を突きつけられる。

「何処に行くの？」

「何処だって構わんだろう」

「構わないけど、…貴方は私たち人間の敵。このまま放って置くと思う？」

「思うな。それに俺としては別にどっちでも良いんだが……」

「その銃のトリガーを引いてみる。先に消えるのはお前だぞ」

先程よりも強烈な妖力を放出する。

普段はあまり目立ちたくない為妖力は抑えている。この百数年間に手に入れた技術だ。

そして態々隠していた妖力を開放するのは俺なりの　俺だけではないかも知れんが　威嚇である。

そして矢張りその意思は向こう側にも伝わったらしく。

「はあ……」

溜め息をついて銃をおろす。

「そういえばまだ名前を聞いていなかったな」

「そうね」

「……………」

自分から名乗れと視線で語りかけてくる。全く。名乗る時はまず名乗らせてからだと言っのに。…………あれ？今俺がその状態？

「藍賀。苗字はない。好きな呼び方で呼んでくれ。種族は分かん」

「私は矢意永琳^{やじこるえいりん}。色んな場所で研究員をしているわ」

矢張りそうか。

前の人物は矢意永琳その人であった。通りで見た事がある気がする訳だ。

「つと、そろそろ戻らんと」

「何処に？」

「家に。自分ちに帰るのは当たり前だろ？」

「まあ、そうだけど」

「だろ？じゃあな」

そういつてエレベーターに向かって歩く俺であった。

ガツッ。

「うをおっと」

床のコードに躓いて転んだ。

……………締まらねえ。

文明はそう簡単に滅ばない。（後書き）

はい！と言っ訳で妖限騎最新話です。

所々藍賀の性格が変わったりしてゐる気がするのは自分だけ？書いてる自分で言つのもアレですが。

やはり更新速度は乾パンの賞味期限のように遅いです。はい。

早く自分ちもネット繋がないと……………。

てかタイトルが文章中約二行分としかかみ合っていない件について。

でわ、感想指摘アドバイスなどありましたら、よろしく願いします。

大剣使いと鎧の敗北（納得いかん）（前書き）

早めに更新妖限騎。今回はいつもより早く（とは言え前よりは遅く）更新ができました。ヤフー。

そういえば前々話に自分の体の細かい様子が判っていましたが、アレは自分の能力で鏡を作ったという事で。

目に関しては何れ話の途中で出てきます。

最近またアーネスト・ストレイヴンACLRにはまりまして。PSP版の。

昨日から始めてやっと進行度が98%まで行きました。ストーリーが大変です。主に。

アリーナはそれ程でもないですが。ランク1の奴が以外に強かったです。

後自分は主に中量機体使います。ロックオンサイトを上下に動かすのが苦手なので空を飛ぶ敵は大体EOで落とします。

話し分かんない人御免なさい。

今回はほんの少し、ほんの少しだけ時間を飛ばします。でわ長々とした前置き失礼。最新話をどうぞ。

大剣使いと鎧の敗北（納得いかん）

永琳との出会いから3年と15ヶ月

正確には4年と3ヶ月

経った頃、

シャトル発射の準備の一環として邪魔をさせない為、妖怪掃討作戦が決行されていた。

俺から見て下は既に火の海である。が、奴等が討っているのはただの妖樹だったり、妖石だったりと。

単に俺の妖力を少しだけ籠めた何でも無い物だった。多少の生命活動は行っているが、自我は無く意識も無いので苦しみもしない。

そしてそろそろその数が半数を切った所で、

「撃てええ！」

と、此方にもミサイルやレーザーが飛んできく。

俺は戦う気などこれっぽっちも無いので、全て避けるか変形させて俺に当たらない様にする。

そもそもの事現在で俺と光以外の妖怪は此処の辺り、つまり都市の近くには居ない。

天狗の屋敷も俺が無理矢理響を納得させて移動させた。それもかなり遠いところに。

単なる資源の無駄遣いである。

然し、

「何時になつたら発射するやら。こちとら既に2、3時間待ってんぞ」

そうなのである。

永琳と分かれた後、俺は素直に家に帰る訳も無く、都市の中をほつつき歩いてなんか一番高級そうな、偉そうな感じの家に忍び込んだのだ。

その時に見た資料の中で今日にシャトルの発射が行われると書いてあったのだが……

「なかなかこねえな」

全く、待ち草くたび臥れてしまう。

一方的な光線。それに加えての妖力の拡散、消滅。自然破壊。人の無駄な雄叫び。

知り合いの仕掛けた罠がばれない様、今俺は人間の殲滅部隊とやらに断片的に損害を与えている。

断片的というのは全部を殺す訳ではなく、10分の3程度で十分だ。なので都市の様々な所から出てくる個別部隊も徐々に数を減らしている。

が、奴等前回の大战で結構な戦力を失ったと思いきや、シエルター

確か金属とか言うのを分厚く固めた壁のある所 の中に

まだ沢山居やがった。

今回は空《宇宙》に飛んで行く為の道具を打ち上げるのを邪魔されない様、俺達を皆殺しにする為に始まった戦いらしい。

まあ恐らく俺とあいつ等 天狗達とあの二人 以外にこの

辺りに妖怪はおらず人間に無駄に消耗させる為に罠を張ったらしい。

だが俺としては微妙に納得がいかない。何故なら、

「働いてんの殆ど俺じゃね？」

大量の人間がシャトル発射施設に向かっている。恐らくは発射準備が整ったのだろう。

だが、都市の外に出た人間達は依然戻ろうとしない。さっきよりも抵抗が激しくなっている。勿論俺の方にも攻撃は飛んできている。中っていないが。

恐らく、と言うか確実に捨て身で戦う気なのだろう。あいつが良く働いている証拠だ。

が流石に俺も鬼ではない。一人であの数と戦うには無理があるだろう。

なので、

「そろそろ、助太刀に出てやりますかね」

仕方なく、空からあいつの居る地上へと降りて行くのだった。

因みに、空を飛ぶのは自分に翼があることを自覚したときから何故か出来た。要は感覚なのであろう。

BGM：【東方Vocal - 緋色のクオリア】

飛んでくる物全てが鎧に中って碎ける。或いは拡散する。

鎧を着ると翼は無くなるので途中からパラシュート無しスカイダイビングである。こえー！。

でもって今俺は焼けた森の中。正確に言えばさっきまで頑張ってた奴、^{やまと}倭のいた所。

現在はアレ《倭》と合流し、人間の殲滅部隊を殲滅している。そこまで強い訳でも弱い訳でもなく、丁度良い相手だ。

然し何人が精鋭中の精鋭が居るらしく、そいつ等だけは後回しにして雑魚から潰して行く。

「ちょこまかと、うつぜえんだよオー！」

そう人間 ^{バフネドツ} 装備からして精鋭の一人 ^{バフネドツ} の一人が叫び、硬そ

うなPSの背中から2丁のショットガンのような銃を手に取り、

巨大な銃声。が、

金属と金属が思いつ切りぶつかり合った時の音がする。

そして驚愕の声。

「なっ！」

今更驚く必要も無いだろうとも一瞬思ったが、そういえば俺はまだあいつ等の攻撃を一発も受けていなかった。

それに、『ありとあらゆるモノをずらす程度の能力』を持つ倭にとつてこいつ等の攻撃は鉛筆で字を書くよりも、妖力を扱うよりも簡単な事だった。

まあこれだけの事を目にして、今まで自分達の科《化》学力に耐えた物など無いと思い込んでいた人間は驚きざるを得ないだろう。

故に隙が出来る。

「准将！」

「……ッ！」

とは言ったものの、その命を絶つのは俺ではなく、倭だ。アイツの方が動きが早い。

言ってなかったが、倭は両手に巨大で重く鋭い刃を持つ大剣を持っている。要は2本の大剣を簡単に振り回すと言う事だ。その上機動力を失っていない。

周りに飛散る血。切り落された上半身が地面に落ちる音。

そしてもう一つの命が消えると同時に三つ目の命も消える。

「俺達に隙を見せた事が命取りだ」

そして残った奴等は固まり此方に向けて銃を撃っている。馬鹿め。

俺の能力で銃をくしゃくしゃに曲げ、攻撃の止まった所で倭の3撃。

全滅。

「全く、軍で教わらなかったのか。巨大な近接武器を持つ相手に対して固まっではいけないと」

「戦いの基本だな。どんな奴にでもそうだろう。普通」

と、殆ど如何でもいい会話をしていると後ろの方から声が聞こえた。

「俺達、の、勝ちだ……………」

次の瞬間、

業炎。俺達の視界は真っ赤に染まった。

目を開けるとそこは深い森の中だった。

一体どれほどの時が経ったかは判らない。今までずっと寝ていたの

だから。

然し、隣に倭の姿が無いと言う事は焼けたか俺を盾にして生き延びたかその際に何処かに飛ばされたか能力で何処かに飛んだか。そもそも飛ばされたのかすら判らない。目の前が真っ赤になった所までは覚えていたのだが…………。

とにかく空から何かを見つけよう。

と、此処まできてあることに気づく。

能力が今までと違う……………？

ふと思ったのだが微妙に違うのだ。なんか前より簡単と言うか、強いと言うか。

『作り変える程度の能力』

以前は形のあるものに無理矢理別の形を与えると若干疲れたが今回のはそれが無さそうだ。進化？

と、自分の能力の進化（？）に喜びながらも鎧を解き翼を出して空に上る。

「あ……………そんなに飛んでねえか。氣い失っただけかよ」

俺の視界の先には薄っすらとシャトル発射の後の煙と、都市から上がる煙 どちらにしても煙だが が見えていた。が、

同時に色々やる事があり、これからまた忙しくなるのか…と若干の面倒くささも感じていた。

………そういえばさっき人間が俺たちの勝ちだとかほざいてたが、実際俺は納得していない。なぜか苛々する。

能力で結構遠い場所まで飛んだ俺は愛用の剣が両方ともあることを確認して立ち上がる。

微妙に頭がクラクラするのは何処かにぶち中てでもしたのだろう。

そんな如何でもいい事を考えながらも歩き出す。

と、頭の上、遥か上空から若干の妖力を感じる。

何かと思いい上を見上げるとそこには見覚えのある逆^{いかり}錨型の黒い影。

ついさっきまで少しだけ死んだのかと思っていたが、矢張りそれは無かった。

なんといつても鎧を着たあいつの固さ防御力には理不尽過ぎる物がある。

始めて会った時、攻撃的な拳動を取られたので反撃した所自慢の愛剣、来電と紫電が叩き折れたのを良く覚えている。

何があれば世界最強を誇った俺の剣が折れるのかと暫く思考停止していた所、横から話し掛け謝り、笑いながら両方の剣を元の形に戻した時には余計に吃驚して口が塞がらなくなった物だ。

因みに俺が自分を世界最強と言うのは決して顕示^{けんじ}などではなく、世界全土を回り力のありそうなものを片っ端から、その全てを打ち倒して行ったからである。

然し上には上が居るとはよく言ったものだ。言ったのは藍賀自身だが、確かにその通りだった。俺は奴に手も足も出なかった。

と、色々と考えている間に何時の間にか影を見失ってしまった。

早く俺もさっきまでの戦いの結果を見に行かなければ。

戦場跡に行くと濛々《もうもう》と煙が空に向かって延びていた。

シャトルは丁度都市の中心地から発進した様で、都市の真ん中にはどでかい穴が開いていた。宛らクレーターの様である。

そしてその隣には小さい人影とその隣に巨大な影。倭か。影の形で分かる。主に剣。

にしても矢張り移動では倭には適わない。幾ら空を音速で飛ばうと瞬間移動に勝てる訳が無い。

と、影の真上に着いたので翼を畳み真下に落ちる。降りる、では無く落ちる。ここ重要。

して勿論真下に居るのは倭なので俺を受け止めざるを得ない。あいつの事なので恐らくは剣で防ぐだけだろうが

それから暫く俺は空から急降下する時自分の力以外は信用しない事にした。

大剣使いと鎧の敗北（納得いかん）（後書き）

妖限騎最新話ですはい。

何時も最後がこんな感じなのは大体自分がその日これ以上書くのが面倒になったからですはい。すいません。

ですが出来るだけ投稿は早くしますので、どうかご勘弁を。

そういえば今日友達主催のデュエマの大会があつて行つて来たのですが、敗者復活戦があるといつていたので副賞だけもらつてこ。と思つてたら

「負けたの？…ああそういえばお前戦つてる間に復活戦の順番決まつたからお前リタイアね」

つて言われたんですよ。はは……。俺来た意味なくね？しかも主催者優勝だし（笑）。

今回戦いの描写少なくてすいません。本とはもつと描きたかつたんですが、疲れていてあんまり描けませんでした。この埋め合わせはまたいずれ。

まあそんなこんなで妖限騎関係ありませんがこれからも妖限騎をよろしく願います。

評価・指摘質問感想お待ちしております。

鬼との初謁見（前書き）

久しぶりで御座います。JSです。更新遅れて大変申し訳ありません。

暫く執筆に手が付かない状態で文のクオリティーが落ちていますが余り気にしないで下さい。直に戻ると思いますが。

では最新話をどうぞ。

鬼との初謁見

あの後俺は倭との合流を果たして街の中を漁りに行った。

正直言ってもう既に此処に用は無いのだが、何か面白い物見つかるかな。的な乗りである。

まあ俺の漁る所と言えば大方予想は付くであろうが、一応。

まず此処の武器庫や産業区それから電気製品売り場（今となつては売るとは言わないが）だ。

して今は武器庫の中で色々使えそうな物を掘り出しているところだ。何かやけに瓦礫が多く非常に面倒である。

「あ、グレネードランチャー」

「なんだそれ」

「爆発物を撃ち出す機械」

「へえ」

あまり興味が無さそうだ。無いなら聞くなという話だがあえて言わない。

それよりこいつの弾が欲しい。これがあるなら近くにあるはずだ。探してみよう。

「おお、なんだこれ」

「あ、それだ」

案外近くにあったらしい。

とりあえず訳の判っていない倭君は放って置いて今はもつと兵器を掘り出そう。後々役に立ちそうだ。

…然し腰を曲げたまま作業するのは案外キツいな。ヘルニアになっ
てしまいそうだ。

と言つかこのGRグレネードチャージャーいつまで持ってりゃいいんだ。これ結構重いぞ。

都市の残骸を漁って出てきたものを整頓しながらこれから如何しようか考えていた。

正直なところ今が何年か分からないので時代の特定のしょうが無いが、取り合えず先ず行くべき場所は諏訪神社と俺の記憶が語っていた。

確かそれ以外にも旧作要素があつたはずだが、それはまあ置いていて。

これから旅に出るのは間違いない。目的地も決まっている。

……よし。今から旅の準備をしよう。

アレから150年程後。

とある日本の小さな村でとある噂を耳にした。

曰く「鬼の出る山」だそうだ。

最近その山の周辺で妙に妖退（妖怪退治屋）が多いと思ったたら如何やらそれが原因だったらしい。

話によるとその鬼の出る山の頂には古びた木造の城があるとか。
恐らくこれは昔天狗の使っていた屋敷の事だろう。壊しもせず放
つて置いたらしい。

まあ屋敷の事は如何でも良いとして、少しその鬼に興味の沸いた俺
は近くの村に寄っては情報をかき集めをしてようやくその山に辿り
着くに至った。

で、鬼の山。

ここに来るまで一睡もしていないので感覚的に眠いが、体が眠りを要求していないのでそのまま登り続ける。

と、暫く登って周りに多少霧が出てきた。そしてその更に奥のほうに妖怪の気配とでも言うのだろうか？そんな感じがある。

然しその気配の隣にもう一つ何か別の……何かを感じ取った俺は歩く事を止め、今まで隠していた漆黒の翼を展開し、低空飛行でその気配のある所へ飛んだ。

気になって来ては見た物の、そこには仲良く酒を飲む人間と鬼の姿があった。

鬼との初謁見（後書き）

終わり。

始めの頃のように文章量が果てしなく少ないですが、気になさらず
いづれ増えます。

最近暇がなく書いていなかったせいで余り書けなくなってしまった。
まあ、隙あらば書くの精神でやっで行こうと思いますので、よろし
くお願いします。

……………予想通り月刊に成ってしまった。

では次回で。

配点

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9893v/>

東方妖限騎 ~ we theleading ~

2011年11月17日21時16分発行